

閉会の挨拶

石井：札幌でも、一年で一番暑いと思われるこの時期、2日間に渡ってシンポジウムに最後まで参加していただいた講演者の方々、またフロアの方々には大変感謝しております。

今回のシンポジウムですが、非常によくできたタイトルであったのではないのでしょうか。私自身も、常日頃、情報化社会について考えることが多いのですが、今回はタイトルが示すように、身近な中での情報化社会を考えるには、大変に有意義なシンポジウムになったように思います。

ただ、今回のテーマは、身近な社会の有様を通じて、メディア社会を考えるには良い機会だったのではないかと思う反面、次々に登場する新しいメディアとコミュニケーションの問題、特に情報管理の有様を考えるには、若干、時間が足りなかったように思います。先程、管理社会ということで『1984年』などが話題になりましたが、極端な場合、身体レ

ベルの管理、例えば受精卵が着床前に選択されてしまうような生体レベルでの管理も、新しい形式の情報管理のシステムとして着目すべきだと考えます。これは、今までお話しになってこられたような意味でのメディアを介した情報管理とは、全く別の次元での管理システムの問題ですので、本テーマからは多少逸脱する問題ですが、いずれは、真剣に考えなければならない時が来るのではないかと考えています。

いずれにしても今回のテーマの中で議論された問題自体も、これで終わるわけではなくて、これから話が始まっていくのだと思いますので、皆さんの研究がご発展していただければ、研究委員会としてもシンポジウムを開催した意義があったように思います。

お忙しい中ありがとうございました。これをもってシンポジウムの閉会とさせていただきます。